正「如何にも長曾部殿の民部之輔正雪が長曾我部殿をお慕ひ申します故去る方よりやう〳〵のことで手に入れたるのでおざいます」忠「それは珠ねて丸橋忠彌が長曾我部元親の末孫を唱へて居りますから正雪が之れを手に入れ様と云ふ所から斯くの如きものを求めまして置きましたので詰り謀り計でございます」忠「拙者は母方に發はれて丸橋を名乘りしものにおざれば父の事蹟は幼稚の折のことと故知りませんけれども只父の事のみ思ひ居ります故今日との御席て親父の書き物を見まして目前に逢ふ様な心持ちがしまして……」と頻りに慨きおがら云ふて居る様子　正「然れば君父の仇は倶に天を戴かず御身は長曾我部殿の仇をお打ちあさる思召はおざらんか」忠「シテ其仇と云ふは……」正「されば徳川……」忠「エヽッ……」正「家康の爲めに貴方の父長曾我部は都四條に於て梟木に曝らされ……今は三代の世と相成ッて居りますがみの徳川か御身の仇ではござらんか夫れを打つ思召はおきや……と言はれて忠彌は膝を進め　忠「容易あらざるとの御一言大膽とは必得るあれども其御準備に依ッては打てんみともおざりますすまい其義は如何でおざいます」正「天下は一人の天下にあらず天下の天下たり徳川の歴制四民塗端の苦しみ斯く申す民部之輔正雪は上役人に媚び諂らふ心は更にあし……恐れ多くも我が日本帝國に天子あッておきが如し斯の如き徳川の驕者惡みても猶余りあるとゝ存じます其昔北條高時御醍醐帝を無きものにせんと臣下の身を以て佐渡の島へ流せしみとありしが夫れに勢ひたる徳川の歴制……我々萬民に代つて徳川政府を顚覆なし其時みそあれ今の徳川に代ッて天下泰平を唱へ萬民を安せんと欲する手前如き匹夫に成はみの念は更に

みれ無く御身は長曾我部殿の末男あれば君を立てゝ大將とおさん民部之輔か存念然して天下泰平國土安穩に此天下を代づて治めんが曾つてより望む所の胸中然し御身も寄心した以上は忠彌殿サー……此民部が采配を取ッて大元帥とおつて德川を倒すの計畫忠彌殿黨中に組入あさる御思召おきやと三寸不爛の舌頭を以つて丸橋忠彌に迫るとの一言面白き事に依つて親の如くとあつて忠彌も黨中に入りました正雪は　正「イザ御覽下さいと連判帳を持つて參りました見れば大凡一万三千人の名前が書いて有る其初筆の所が一つ抜けて居りますから忠彌も變な事と思ひましたから忠彌は　忠「正雪殿此初筆に抜けて有りますのわ何方を……　正「初筆は丸橋忠彌殿……　忠「イヤ民部殿御身は我れとわ敵同士にて惡口をおせしに夫れを　正「元より大將とおすべきも顧みづ我れを元から黨中に……

わ御身より外におし故に我れを憎むとも正雪わ御身を黨中に組入れんと思つて居たる所計らずも今日の面會イサ……忠彌殿是れに血判をと云うので忠彌わ血判を致しましたがして見ますと丸橋忠彌も正雪から見れば智慧かおいのて有ましようと正雪わ急よ望みが叶ひましたから慶安の四年七月廿六日江戸京大阪駿河の府中と四ケの津へ黨中を悉く手配をおし同日同刻軍を起おし德川の天下を顚覆おさんとする此時豈圖らんや忠彌の短慮たつた一言から、七月廿四日の夜忠彌わ小石川の御茶の水の宅にて町奉行石貝左近將監殿の手に召し捕られましたから正雪わ駿河に居て早くも之れを知つて切腹をしたと云う之れ丸橋忠彌の短慮の一言にて折角の計畫も水の泡におつたのですが此時德川を潰したあれば容易おらん事で御座いましよ之れに付いてわ柴田三郎兵衛佐原十兵工川原正國おど

云う大才大器量人を黨中に組入れる御話して御坐いますが此事わ丸橋忠彌正雪對面と云う外題の外で御坐いますから止めまして一寸お貧け講談として申し上ます尤も慶安大平記に白石噺は關係の有るよう事も何れの書物にも又講談にも申し上ますが之れは實説の白石噺故關係わ御坐いませんが皆樣方の御考へに關係があると御承知ですから此の後へ付けました

由井正雪
丸橋忠彌

兩雄美談

終

明治卅年二月五日印刷
全　年二月九日發行

東京市淺草區福富町廿九番地
錦城齋貞玉事
講演者　柴田貞

同　神田區佐久間町三丁目卅八番地
發行者　市川路周

同　神田區柳原河岸十四號地
印刷者　大塲沃美

同　神田區佐久間町三丁目卅八番地
發行所　文事堂

版權所有

097210−000−2

特9−289

白石嘶孝女の仇討

錦城斎　貞玉／講演

M30

DBS−1023